王の酒と自転車２号

みゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
王の酒と自転車２号

【Ｎコード】
Ｎ４７３９Ｚ

【作者名】
みゅう

【あらすじ】
第５次聖杯戦争。遠坂凛は万を期して英雄王の召喚に臨むが致命的な『うっかり』を連発してしまう。また、聖杯戦争を目撃し、サーヴァントに二度襲撃された衛宮士郎は土蔵に逃げ込む。そこにあったのは魔法陣と一台のママチャリ。そして彼を救ったのは長身の美女だった。

第一話　歪な召喚（前書き）

本篇再構成もの。英霊入れ替わりなどの状況改変です。

第一話　歪な召喚

第一話　歪な召喚

とある屋敷の地下室にて、１人の少女は真夜中に動き出す。

「素に銀と鉄。　礎に石と契約の大公。　祖には我が大師シュバインオーグ。　降り立つ風には壁を。　四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

体を、心を歯車に変えて、一つの神秘を成すパーツへと変質させる。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

魔法陣に用いた宝石の質は最高ランクのものを惜しむことなくつぎ込んだ。じきに午前二時、魔力のピークも今で間違いない。触媒には、かの英雄王に縁のあると伝えられている“この世で最初に脱皮した蛇の抜け殻の化石”を用いた。父が前回の聖杯戦争で用いるはずだった聖遺物。

ここまでやって失敗するわけにはいかないわ。

「――――――Ａｎｆａｎｇ（セット）」

魔力回路に魔力が走り、地下室には魔法陣を中心として濃密なエーテルが渦巻いていく。

腕が――――体中が、熱い。

「――――――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

さぁ来なさい。最強のサーヴァント。私に勝利をもたらす者よ。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！」

エーテルと紅い光の奔流が、地下室を弾き飛ばすかの如く吹き荒れる。あまりの眩しさに瞳を閉じた。そして期待して彼の訪れを待つ。

確信した。上手く行った。完璧だわ。

場の魔力が収まるのを感じとり、瞳を開く。しかし目の前には肝心のサーヴァントはおらず、目の前には先ほどの魔力嵐で少し散らかった地下室だけ。

どういうことよ。失敗したの？

すると、上の方から何か音がした。具体的に想像するならば、何かが屋根に落ちて来て貫いたような、本当なら考えたくもないような音が地下室からでも確かに聞こえた。

もしかして、またやっちゃった？

嫌な予感がして上の階、居間に上がる。何故か鬱陶しいことに、扉が壊れて開かなかったのでヤケクソ気味に蹴り飛ばした。

「ドア壊れてる！？　あぁもう、邪魔だこのぉ！！」

すると目の前に広がるの凄惨たる光景。間違いなく屋根から何かが落ちて来て居間を滅茶苦茶にしている。そしてその原因であろう金髪の少年が紅いソファに腰掛けている。

どうしてこんなことになったのか、そう考え込むまでもなく柱時計の針を見ると理解した。この時計の針は一時間早い。つまり、魔力のピークに達していなかったためにこんなことになっているのだ。

しかし、この居間には屋根から降って来たと思われる少年がいる。召喚自体は失敗ではないはずだ。声を掛けようとすると、先に少年の方が話しかけて来た。

「あの、すみませんが。お姉さんが、マスターであってますでしょうか？」

自分より年下の小中学生にしか見えない金髪少年は、腰低い態度で少女に訪ねてきた。

「そうよ。私があなたのマスターの遠坂凛よ」

彼の姿を観察する。小柄な少年は一見只の外人の子供に見える。しかしあり得ない紅色の瞳に、人のみではありえないほどの魔力量。これが英霊でなくて何だというのか。

「そうですか。いきなり上空に召喚された上にマスターらしき人の姿が見当たらなかったので、しばし呆然としていましたが。お姉さんがマスターでしたか。よかった」

少年は笑顔を向ける。

やばい。この子凄い可愛い。そっちの気があったら一瞬で落ちてしまいそう。カリスマ持ちねこの子。

「それじゃ、色々あったけど気を取り直してさっさと契約しちゃいましょ」

「ええ。それがいいですね。まだ完全にパスが通りきっていないようですので」

「サーヴァント、アーチャーの名に懸け誓いを受けます。遠坂凛、この聖杯戦争において貴方を我が主として認めましょう」

拳の令呪が熱くなる。確かにここに契約が交わされたのだ。

ふ～んアーチャーか。セイバーじゃなくて残念。でもこの子ってセイバーって雰囲気じゃないわよね。あっ。

クラス名は先ほどの誓いで少年の方から名乗って来た。しかし、まだ肝心なことを聞いていないことに気づく。

「あっ、忘れてた。それで一つ訊ねるけど、あなた本当にあのギルガメッシュで間違いないわね？」

「ええ、間違いなく僕がギルガメッシュ本人です。お姉さん、こんな姿では信じられないかもしれませんが」

「あの英雄王がこんな子供だったとはね。まぁいいわ。ところで、

パスはきちんと繋がっているみたいだけど、貴方の現在の調子を教えてもらえるかしら？」
「ええ、お姉さん。魔力は充分過ぎるほど供給されています。そのおかげか敏捷値と魔力値が上昇してます。他のステータスはあまり変わりません。ただ幸運値が大幅に低下しているのが気になりますね」
「うわぁ。私も今確認しているところだけど、あなたかなり凄いじゃない。筋力B、魔力A＋、耐久B、敏捷A、宝具A＋ですって！？　幸運値がEってのを除けば、アーチャーとしては破格よ。ひょっとしたらセイバー以上かもしれないわ。本当あなたを召喚して良かった」

見た目が子供のため、能力が低いのではないかと懸念していたがそんなことはない。予想以上の現状に思わず笑みが零れてしまう。アーチャーも顔を若干赤くしながら笑みを返してきた。

「ありがとうございます。そう褒めてもらえるのはうれしんですけど、実はこの姿って最盛期のすがたじゃないんですよね。実際の戦いになったらリーチの問題が出て来るとと思います」
「何でリーチが関係するの？　あなたアーチャーでしょ。遠くから狙撃すれば問題ないじゃない。もしかして弓を引くのに背が足らないなんて言わないでよね」
「そこなんですが、さっきの召喚のせいなのか、宝具は2つの内の1つがなくなっていて……」
「えっ？」

一瞬、頭の中が真っ白になった。何かが崩れ落ちるような音、仏壇で鳴らす“あの音”の幻聴が聞こえた気がする。

「もう一度言って頂戴。アーチャー？」

「お姉さん、いえ、マスター。報告すると僕が所有しているはずの宝具が一つ足りません」

場の空気が凍りついた。これは“うっかり”では済ませられない事態かもしれない。アーチャーも年相応の子供のような、すがる瞳を向けて来る。

「――――原因はさておき、それって拙いわね。ちなみにどういうものだったの？」

「ラ、ランクＥＸの剣です」

「な、ＥＸ！？」

「はい、お姉さんの魔力なら存分に扱えるはずだったんですけどないものは仕方ありません。もう一つの宝具でなんとかするしかないんですけど、けど……」

「けど？　そっち宝具はどんなものなの？」

「ランクはＥ～Ａ＋＋の王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）というものなんですけど、これは本来別空間にいろんなものを入れておいて自由に出し入れができるというもので、そのなかには僕が生前集めていた宝具の原点となる武器や世界中の財宝なんかが入っています」

「世界中の財宝！？　もしかして宝石もいっぱい入ってるの？」

「ええ。いっぱい入っていました」

「いました？」

「中身が、中身が何故か“ない”んですよ」

「なんですって？　もう一回言って頂戴アーチャー。あぁ、もう。この言葉二度目ね」

先ほどの言葉が聞き間違いでなければとんでもない事態だ。きっと自分は今、死人のように蒼白な顔をしていることだろう。そして目の前のアーチャーも生気が表情に宿っていなかった。

「武器も財宝も全く手元にないんです。さっき空から落ちてきたとき、飛べるものを用意しようとおもったら何もなくて。いえ、何故か“お酒だけ”はあるんですけどね」
「酒、お酒だけですって！！？」

あまりの衝撃に膝から崩れおちた。涙すら出て来ない。むしろ笑いたいほどの衝動がはらのそこから湧き起こって来る。

もうダメだ。勝てる気がしない。

ごめんなさい。天国のお父様。そしてどうして遠坂家の呪いを解いてくれなかったのですか。

「僕の手元には肝心の武器がない。これは非常に拙い状態です。お姉さん、これから僕たちはどうしたらいいでしょうか……」
「な、なんで、こうなるのよ！」

両手を床について嘆く。あまりにもみっともない姿だが、己の迂闊さに心から嫌気がさすのだ。

「僕に言わないで下さいよ。途方に暮れているのは僕も一緒なんですから。もう少しこれからの前向きな対処方を考えましょう。まだ全てのサーヴァントは召喚されていないのでしょう？」
「ええ。まだセイバーとライダー、アサシンは召喚されていないらしいわ」
「でしたらそれまでの準備期間に宝具に匹敵する武器を世界中から集めましょう。僕の攻撃は主に剣の射出ですから。とにかくたくさん必要です。ステータスは他に劣らない自信がありますし、剣も問題なく扱えますが、こちらと違って敵は宝具を使えます。宝具でなくてもいいのでそれに劣らないぐらいの武器を確保できないでしょ

うか？」
「冗談言わないでよ！　ただでさえ家の魔術はお金がかかっているの！　あなたを呼び出すための魔法陣に使った宝石だってかなり痛い出費だったのよ！　それでこの現代に宝具に匹敵する武器を調達するですって！？　冗談じゃないわ。もう今夜はヤケよ！　その酒ってのを寄こしなさい。今日は呑むわよアーチャー！」
「お姉さんって、未成年じゃ？　日本って２０歳未満はお酒はダメなんでしょ」
「グダグダ言わない。さっさと出しなさい。世界の財宝を集めつくしたアンタがもってるからにはよっぽど良いお酒なんでしょ。出しなさい。そしてお酌しなさい。これはマスター命令よ！！」
「……はい」

酒がないとやってられないわ。今日の出来事なんか忘れてやるんだから。

やれやれといった様子でアーチャーは背後に現れた空間の割れ目からその酒を取り出した。そして注がれた酒を一気に飲み干す。

「あら。これすごい美味しいじゃない。こんなの一度飲んだら他のお酒なんて飲めないわね」
「気に行って頂けて何よりです」
「本当においしいわ」

本当に言葉で表せないくらいにおいしい。これのためなら宝石の１個や２個惜しくないわね。ん、アレ？　アーチャーのものは私のもの、私のものは私のもの。うん。間違ってない。なら、これはもしかしたらイケるかもしれない。

「なんだか凄く嬉しそうですね。元気になってくれて良かったです」

無邪気で、そして不幸なアーチャーはあかいあくまの企みを何も知らない。

第一話　歪な召喚（後書き）

他にメインの作品があるため、正直不定期更新だと思います。が、アイディアは大体出来上がっています。感想など頂けると幸いです。次回はシロウの物語です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4739z/

王の酒と自転車２号

2011年12月16日00時51分発行